

日はまた昇る

アーネスト・ヘミングウェイの長編小説のことを書こう、というのではありません。

私の手元には、

○エズラ・F・フォーゲル著

「ジャパン・アズ・ナンバーワン(1979)」

○ビル・エモット著

「日はまた沈む(1990)」

○同著

「日はまた昇る(2006)」

という3冊の本があります。

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」は、1980年代にいたる日本の驚異的發展の要因を分析したものです。

当時は、日本の経済成長には凄まじいものがあり、外国からは、日本的経営が評価され、日本に学べという声が聞かれもしました。

日本経済発展の原動力として、終身雇用や年功序列賃金、労使協調路線、更には法人資本主義といったことがあげられています。同時に、著者は、様々な面で閉鎖的な体質を放置したまま、日本が国際経済の中で成功し続けられると思っている人がいたら余りにも楽観的であり、日本人には傲慢にならないようにと忠告しています。

「日はまた沈む」は、まさにバブル景気に浮かれていた時代に、日本は、消費者の国・年金生活者の国になるだろうとし、いち早く日本経済は下り坂にはいることを予測しています。

そして15年後、「日はまた沈む」の著者が、今度は、年金や医療更には教育改革、更には競争促進のための半独占政策の強化などに取り組むことを

前提に、日本経済の再生の予兆に言及したというわけです。

日本経済がアメリカを抜いて1番になったことはないし、低迷はしているけれど沈没してもいないとは思っていますが、1980年代後半から1990年代前半にかけてのバブル経済、その後の景気低迷の状況を見ると、大筋では両者の予測は当たったといえるでしょう

こうした中、東日本大震災が発生しました。ビル・エモット氏からいくら「日はまた昇る」といわれても、震災の影響は極めて甚大であり、日本経済の立て直しには大きな困難が伴うことは想像に難くありません。しかし、歴史を振り返れば、良いとき、悪いときがまるで螺旋階段を上り下りするようになっているのです。私は、絶好調の中に大きな落とし穴があり、どん底の中に再生のきっかけがあるはずだと考えています。

日本は、これまで長期間にわたってデフレ経済に、もがいてきました。そして、これからという時に東日本大震災に襲われ、原子力発電所が破壊されるという未曾有の危機に見舞われています。しかし、震災復興を通して、日本はこれまでの日本とは違う日本になれる。この危機こそが日本再生のバネになると信じています。

日本人は、過去、幾度となく危機を乗り越え、新しい日本を作ってきたのですから。

その思いを込めて、私も申し上げたいと思います。「日はまた昇る」と。

(塾頭 吉田 洋一)